
十二星座にお願い

針鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一星座にお願い

【Zコード】

N6013C

【作者名】

針鼠

【あらすじ】

私の家の近所には魔女がいた嘘か本当かは思い出せないけど小さい頃の思い出・・高校二年生の文化祭――――――何だか学校では恐ろしい事件が起き始め、何だか巻き込まれそうなかさねだけど?
?・・・

せじまつのせじまつ

私の家の近所には魔女がいた
いろいろな花が咲き誇る大きな庭
美味しいクッキーと異国の香りがする紅茶
顔をぐしゃぐしゃにして泣く私に、魔女は囁いた
それは、魔法の呪文
困ったとき、悲しいとき
きっと貴方を助けてくれる

「かさね——、あんたいつまで寝てるの？！」
はっと目を開ける。

（なんだ、夢か…………）

むくりと田を擦りながらかさねは身を起こした。

今何時

・・・・・

あれえ？

いつもの場所に時計がない。

それもそのはず、時計は無残にも地面に転がっている。
「遅刻だ！！！！！」

「かさね————？？？」

三咲が、ついだばかりのコーヒーカップを手に妹の名を呼ぶ。

「また、かさねは寝坊したの？」

画家の母、美代は笑いながら朝食をとつていた。

「あの子、文化祭でクラスの出し物があるから遅刻出来ない！！！」

つて言ってたくせに見事にいつもの遅刻ね」
どしどしど荒しくかさねが階段を下りてきた。

「結婚式は二三ヶ月後で、お出でにならぬか？」

「おはよう。お寝坊さん」

パンを頬張りながら母は、慌しい娘に挨拶した。

おいたはは「二種能力」でいふものが外にでいるのれ】

『蒙古傳』

「アーチー様……！」

かさねは、遅学がハンを持ち外にてた

大声でそう言って自転車に乗る。

近所に魔女がいたのはもう昔の話
まだ、あの時幼かった私は父と母の離婚により異国の魔女がいる町
を引っ越した。

私の家族の大黒柱の母は、画家をしており自分でもよく絵を描いては仲間に誘われたりして展示会に絵を出している。

姉は、今〇一をやっている。彼女は、玉の輿を狙つてよく合コンへ出かける。会社に行っているのか合コンへ行っているのかよく分か

らない。

そして私、岸本かさね。高校二年の十六歳。
そして――一回目の文化祭・・・・・

そして物語が始まる

「ぎりぎりセーフ！！！間に合った！！」

ガツポーズをしている私に優秀な友人吉野真央は笑いながら言った。

「良かったね、かさねちゃん」

真央に、笑顔を向けた直後――― クラスの男子村瀬が近づいてきた。

「なんだ、今日も飽きずに遅刻かあ？」

にやにや笑っている。笑った顔は、普通の男子より悪くはないが――― やっぱりムカつく。

最初に出会った時村瀬は本当に可愛げのない小学生だった。会話をしようものなら睨みつけ、馬鹿にしようものなら手をあげる。今から考えるとそんな荒れに荒れた小学生村瀬と、よくまあ私も仲良くなれたもんだ。

そんな彼も思春期になると性格もがらりと変わり笑顔溢れる体育系青年に成長をとげたのだった。

村瀬とは、まあ名前でいうと村瀬りょうなのだが奴との関係をいつとまあ単に私の古い友人の一人である。

「遅刻じゃがない！―ぎりぎりセーフよ！―！」

私は、村瀬に殴り掛かろうとしたが村瀬の長い手が邪魔をしてなかなか届かない。

「お？ やるか？」

挑戦的な村瀬に対し私はショックで固まつた。

こんなはずでは・・・・・こいつ成長しそぎ・・・・・

「そつそう、吉野一、長が呼んでたぞ」
思い出したとばかりに村瀬は言った。

「えつ、会長が？あつありがと・・・・・・村瀬くん」

真央は、ぎこちなく村瀬にお礼をいふと早足で出て行つた。

「真央、大変だねー」

ぽつりと呟く私に村瀬は笑つた。

「吉野は、出来がいいからな。お前吉野の爪の垢貰つたら？」
むつとしたが、ある人物に目が止まりそれどころでは無くなつた。
真央が、今話している二人組。

二人ともクラスじゅうの視線を集めほどの美形。

簡単に説明すると右の愛想がいいホスト系は、副会長の飯田海斗
左の無表情男が飯田薫

飯田グループの社長の息子で生徒会長と副会長は親戚同士なんだつ
て、（あんまり似てないけど）

飯田海斗は、去年転校してきたばかりだつたと思つ・・・イギリス
の帰国子女だとか・・・（噂では）

「へー、お前も女だつたのかー」

村瀬が、感嘆の声をあげた。

憤慨した私は、村瀬の足を思いつきり踏んでやつた。

「ただいまー」
「お帰りー」
母の声が聞こえてきた。ほお今日はカレーか・・・・・スペイシーな匂いがする。
「かさねーお友達から小包が届いてるわよー」
「お友達? 一体誰だ?」
「部屋に置いといたから」
「うん、ありがと」
とんとんと階段を上がり自分の部屋に入った。
真っ暗な部屋に明かりを入れる。
机の上に四角形の小包がちょこんとのっている。
持つてみるとうーん・・・・軽い。
宛名は?
無い・・・・・
お母さん、どうして友達だつて思つたんだ?
私は、ベットの上に座つた。ベットの上は、寝巻きなどが散乱して汚い。
小包を振つてみる。からこりと何かが転がる音がする。
私は、手を伸ばして地面に落ちていたハサミを拾つた。

そして、開けてみる。

「…………ネックレスだ」

パワーストーンが一つ皮の紐についているネックレスだ。

「あれ、変な模様がある……」

なんの、模様だろ？見ただことがあるけど思い出せないな……

・

小包を見てみるとネックレスの他にも可愛らしい花の絵が描いてあるカードが入っていた。

私の小さな友人へ

その石は、貴方の身を守る者です。

肌身離さず持ち歩きなさい。

何か困ったことがあつたらあの魔法の呪文を唱えなさい。きっと貴方の助けになるでしょう。

では、また会う日まで……

秘密の庭の魔女より

魔法の呪文？秘密の庭の魔女？まさか、そんなことってある？

あたか、そんなことありますか?

・・・あの魔女から、手紙が来た？？！！

私は、驚いて飛び上がりそうになつた。

・・・・てか、なんで住所知つてるんだろう?

それに”物”なら分かるけど”者”だなんてへんなの・・・・・

てか・・不気味

私は、恐々早速ネックレスをかけてみた。

鏡で見てみる

「ハニカミ」二版二
ながなが 中愛いし なし加

「はーい、今行くー」

姉は、今日も会員……

母とカレーを食べながら好きなバラエティー番組を見ていると母が

唐突に話かけてきた

—
h
—
—
—
?

首にかけたネックレスを見せてやる。

「へえー可愛いー。見せてよ」

ネックレスをはずして母に貸してやる。母は、嬉しそうに受け取る

とまじまじと石を見る。

「綺麗ねー、あれ…………でも、なんで乙女座なんだろ? ね……
・・・かさねは蠍座なのに」

「何が?」

私は、テレビから目を離す。

「ほらー、この模様。よく上口い雑誌とかに載つてゐるじゃない。確か
これ十一星座の乙女座よーお」

母は、模様を私に良く見えるように見せた。

十一星座の――乙女座・・・・・・・・

なんで魔女は私にこのネックレスをくれたんだ? う。

何か困ったことがあつたらあの魔法の呪文を唱えなさい。きっと
貴方の助けになるでしょう。

私の助けに?

あれえ・・・・・・・・

魔法の呪文ってなんだっけ?

魔女は眠つたままお話を紡ぐ

お父さんとお母さんは私が幼稚園を卒業して小学生になるそんな時期に急に仲が悪くなつた。段々と家の空気が冷めていくのを……なんとなく私は感じとつていたのだと思つ……あの頃は、泣いてばかりいた。

家にいるのが嫌で……だから、私は魔女のところへ毎日のように行つていた。

彼女は、気品のある老人だつた。

あの優しい笑顔は、きっと誰もが一度見れば忘れないだろう。お母さんとお父さんの祖母と祖父はどちらも遠いところに住んでいて中々会つことが出来なかつたから……きっと私にとつてあの魔女は、お婆ちゃん代わりだつたのだろう。

黄色の薔薇や桜色の可愛らしい様々な色の薔薇――真白な鈴のような小さな花をつけるスズラン、真つ赤でお洒落な花をつけるガーベラ・・・・・。あの人は、花を育てていた――こんな綺麗な花を生み出せるこの人は小さな頃の私にとつて魔法使いだつたのだろう。

でも、魔女は私にある口囁いた――

”呪文を教えてあげる――”

クスクスと笑いながら――まるで内緒のとつておきの秘密を打ち明ける少女のように魔女は笑つた。

偉大なる

十・一の・・・・・

「・・・・・いでつ！――！」

私は、ベットから転落し逆さまの状態で目を覚ました。
目覚まし時計が、私を見下して時刻を告げた。

「遅刻だ・・・・・」

私は、青ざめた。

自転車を猛スピードで走らせてきた私は、どうにか遅刻ぎりぎりの
時間で学校に辿り着いた。
心の中で密かにガツツポーズを決め——堂々と私は靴を脱ぎ棄て
下駄箱に靴を入れ構内に入る。
「あつつい～・・・」
息を整えながら私はぱたぱたと手で自分を扇いだ。
ざわざわと声がする。

۱۰۷

生徒たちが一斉に廊下にある連絡掲示板を眺めている。生徒たちの中に村瀬を見つけ私は声をかけた。

「おーい、村瀬ーつ」

私は、遺既した。

「何だとは失礼なー・・・ねえ、皆なんで集まつてるの?」

木瀬は少し機知が悪そには鄂で運転指示機指した

私は絶句した。

『文化祭を止めろ』

『文化祭には死人がでるぞ』

『カラヌイさま』は生贊を欲している

新聞を切り取った刑事ドラマで出てきそうな脅迫状が連絡掲示板に貼つてあった。

絡掲示板の下にポツンとおいてある。

「犯人は、よつほどの暇人だな」

村瀬が、飽きたようにいう。でも、私は頷けなかつた。

危ない
危ないと頭の中で警報がなつていい。

何か禍々しいものが渦巻いている。

なんでそんなこと思うんだろ？

導師は弦き闇の中の猫は笑う

「お、真央だ」

村瀬が手を振った。確かに真央が走つてくる。だが、その後ろを、どつかの少女マンガのように背景に花が咲くんじゃないかと疑うほどの王子一人が歩いてくる。

「真央

真央は、明らかに怯えているようだった。掲示板を見てあのコスモスとくまぬいぐるみを見ていつた。

「やつぱり……」

「やつぱり……？」

私が聞き返すと真央はしまつたといつよつな顔をして誤魔化すように笑つた。

「はい、みんなちょっと御免な」

飯田海斗が、皆を下がらせた。飯田海斗の後を飯田薫が涼しい顔をして、つかつかと歩いてくる。

金髪の飯田海斗と黒髪の飯田薫

感

一人の王子の登場で生徒たちは静まり返る。沈黙の中で最初に口を開いたのは飯田薫だった。

「これを、最初に見つけた人は？？？ 確か……」

私ですと声が上がったのは髪の長い女子生徒だった。ちらりと飯田薫がその女子生徒を見た。

「確か……君は、園芸部部長の……熊本……」

「満です……」

杉浦満は、少し泣きそうな顔をして言った。

おつとりしたような顔立ちの大人しそうな女子生徒だ。

「文化祭に向けて……校門で花のアーチを作ろうって……皆で話して……私部長だから……皆より早く来たんですね……それで

今日は朝一番に学校に・・・・・そしたら、それが置いてあつて・・・
悪戯にしてはとつても不気味で私・・・怖くなつて・・・
そうやつて泣く彼女の背を飯田海斗がそつと優しく撫でる――数
人の女子が、少し不満げな顔でじつと見ていた。

なんだか・・・本当に刑事ドラマ見てるみたい・・・・
予鈴が鳴つた。

「ほら、皆！教室に戻れよ！」

駆け付けた先生たちが、手を叩いて生徒たちを追いたてる。

「行こうぜ」

村瀬が、私を促した。私は、頷くと真央を見た。

「私も一応・・・生徒会だから、かさねちゃん先に行つてて
ばいばいと手を振り真央は走り出した。

”やつぱり・・・”

真央は、そう言つていた・・・真央は、脅迫状のこと知つてたつて
こと・・・・?

なんだか、背筋が寒くなつて私は歩き出した。

ふと気が付くと青白い顔で立つてゐる壮年の男が目に入つた。

あれは――数学教師の長谷川先生・・・・
ぼんやりとかさねは、長谷川を見た――だつて、倒れそう
なぐらい青い顔をしていたから・・・・そして見ている先にはあの
脅迫状――

先生の薄い唇が動く――何かを呟いた・・・
私がじつと見ていることに気がついたのだろう。先生が、じつと私
の方を見た。
色のない瞳――まるで生きてこないことに絶望してこようだつ
た。

「かさね！！」

村瀬が呼んでいる――私は、はつとして村瀬を見つめた。村瀬は、
怖い顔をしていた。そして、先生と私の間に立つと睨みつけるよう

にして先生を見た。

「村瀬？・・・」

村瀬が、普段他人を睨みつけることなんてなかつた――何故怖い顔をして先生を睨みつけているんだろう。

長谷川先生は、じつと村瀬を見ていたが、暫くすると踵を返して職員室の方向へ歩きだした。村瀬の緊張がほどけるのが分かる。

「どうしたの？・・・村瀬・・怖い顔しちゃって・・・」

村瀬が心配そうに私を見た。

「なんでもない・・・・・ただな・・長谷川には近づくな・・馬鹿・

・

ぽつりと村瀬が言った――馬鹿・・・はあ？？そう言われて私が声を上げた。

「馬鹿とは何よ！――馬鹿とは！――

憤慨だ！私は馬鹿じやない！――そりや～テストの点数は田を背けたくなるほど悪いけどさ・・・・

「ほり、授業に遅れるぞ」

そう言う村瀬はいつもの陽気な村瀬に戻っていた。

「一体何なんだよ――思春期か？？私は、首を傾げた。先を行く村瀬に私は渋々ついていった。

でも、頭の中ではさつき先生が呟いていた言葉で一杯だった・・・・

キヨウコ・・・・

先生はそう呟いていた・・・・一体誰なんだろうキヨウコつて・・・・

・

次の日――学校にひとつの事件が起こった。

熊本満が、文化祭の看板の下敷きになり怪我をしたのだ。

肩を打撲した程度のものだつたが学校の生徒は大騒ぎをした・・・・・

まさか——あの脅迫状が原因では・・・誰もが脳裏に浮かべそ
んな馬鹿など笑つた。

しかし・・・馬鹿な考え方だと考えれば考えるほどに・・・植えつけ
られた恐怖は少しずつ根を広げ数日後にはカリヌイ様の祟りだ・・・
・そう言い出す者まで現れた。

そして・・・恐怖する私たちをよそに・・・またあの脅迫状が学校
の掲示板に貼つてあつた。

今度は、人通りが多い・・・昼休みのことだつた。

今度は短く——

”カリヌイ様は生贊を欲している”

そう書かれその下には古びたグローブと野球ボールが置かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013c/>

十二星座にお願い

2010年10月25日19時42分発行